

靴の歴史散歩 ⑧9

皮革産業資料館 副館長 稲川 實

今回は、一見産業資料らしからぬ、されど産業資料という、ちょっと風変わりな明治の木版摺の「団扇絵」(写真参照)をご紹介します。

夏の涼をとるための団扇には、それにふさわしい涼しげな絵か、当り障りのない美人画などが描かれているものだが、これはまったく意表を突いて、文明開化そのものを絵にしているから、異色の分だけ文化資料としての価値もあるのではないだろうか。

しかしこの団扇絵にも、少々のお悩みがある。夏に使用するものなのに、なぜ防寒外套なのか、大いに疑問とするところだが、そのことは本題ではないので、宿題として留保するしかない。

時代を先駆ける新商品は、全部で5点である。一番存在感のある「外套」から話を進めていきたい。

明治、大正、そして昭和初年頃まで、袖がないことから、着物でも着られる外套ということで、男性に重宝がられ「二重にじゅうまわ回し」とか「トンビ」とも呼ばれていたものである。

念のため服飾事典で確認したら「〈インヴァネス〉オーバーコートの袖の代わりに、背丈くらいのケープを付けた外套を指し、背中を箱型に裁つのが基本型で、スコットランド北西部の海港インヴァネスの地に由来する。」とあった。

次に目につくのは「蝙蝠傘こうもりがさ」である。絵で見る限り、雨の日の傘というよりは、オシャレな日傘という感じだか

ら、あるいは普段でもステッキ代わりに持ち歩いていたものなのであろうか。

続いて布製の手提鞆である。同じような模様柄の手提鞆を、同時代のカタログから探してみたら「絨繡製手提鞆じゅうたんせい てさげかばん」と表記があり、尺4寸(42.4cm)サイズで5円ヨリ7円マデとあった。

同時代の別なカタログにも、読めば通じることなのか「重丹合財鞆じゅうたんがっさいかばん」の表記で出ていた。大正4年のカタログを最後に、絨繡製手提鞆は以後カタログに登場していないから、大正時代には姿を消してしまったようである。

明治31年(1898)10月10日の『風俗画報』によれば、団扇絵の黒い帽子は「小鍔こつば」と呼ばれる型で「銀行、会社向きにて総じて粹な形なり。小鍔のうちにも頭低く鍔の聊かかえり拡がれるは、最新の流行にて洋行帰省の紳士間に、折々見かけぬる。」とあったので、ご披露しておきたい。

(この項続く)

